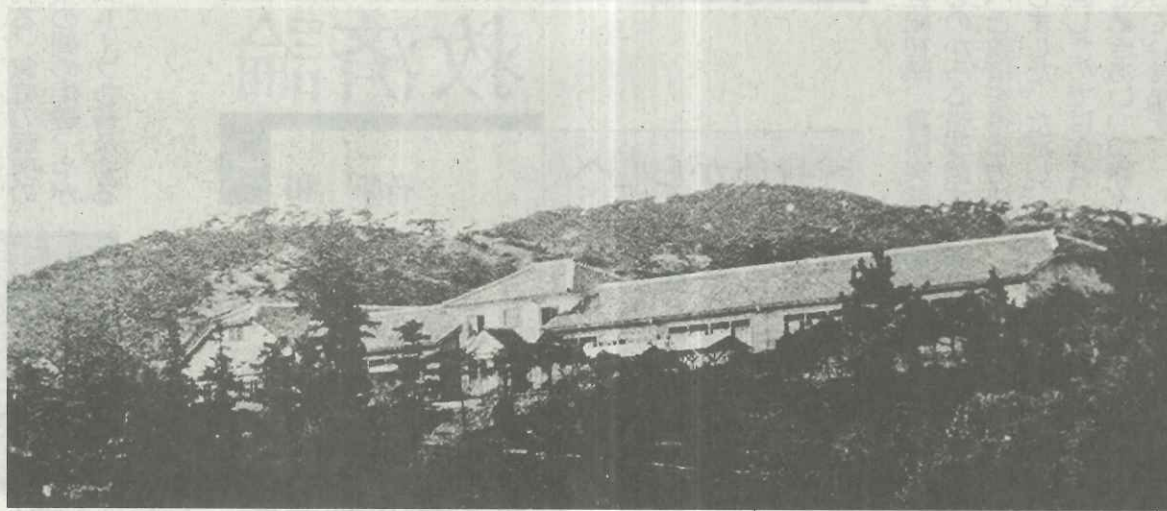


# 弘法山の校舎 1年で幕



自由われらの園  
国府高校100周年

開校まもないころ、約1年間だけ存在した弘法山の校舎=いずれも国府高提供



弘法山校舎時代の正面玄関

## 歴史編①

### 宝飯高女の誕生

国道1号沿いの田園地帯に立つ国府高校(豊川市国府町)は、かつて実り豊かな「宝飯」の地を見渡す弘法山の上にあった。開校して間もないころの写真には、木々の中にたまたまむすびやが写っている。

国府高は一九二〇(大正九)年三月、宝飯郡高等女学校として誕生した。小学校を卒業した男子の旧制中学に対し、高等女学校は女子が進学する四年制(後に五年制)の中等教育機関。第一次世界大戦による好景気や大正デモクラシーの風

潮を背景に、女子教育への関心が高まっていた時代でもあった。

当時の宝飯郡は、現在の豊川市を中心に豊橋市の前芝町や下地町、蒲郡市などを郡域としていた。隣接する豊橋市には市立高等女学校(後に豊橋第一中と統合して豊橋東高)があったが、

まだ愛知電鉄(現・名古屋鉄道)の開通前で、郡中心部からの通学は困難だったという。

宝飯郡高等女学校の創立時を知る教員の一人は、校友誌「光風」の中でこう振り返っている。「女子に中等普通教育を受けさせるにはどつしても父母の膝下を離れて都会地に出なければならぬ。経済的にも監督上からも女子を持つ親の困った問題であったのだ」(原文のまま)

国府には明治初期、現在の中学生から高校生にかけての世代が通う三河最初の中学校「宝飯中学校」があった。水陸の物流拠点として栄えた郡の村々が資金を出し合って創設し、近代的な英語教育などを展開。国の中学校令により、わずか五年半でその歴史は途切れ

たが、「もともと教育に熱心な地。地域には『再び学校を』という思いも強かったのでは」と元同窓会長の林正道さん(81)豊橋市前芝町は推測する。

創立六十周年記念誌などによると、開校して二年ほどは校舎らしい建物がなく、旧東海道沿いにあった裁縫女学校や薬師堂、高膳寺などに教室が設けられた。女学生たちは時間割ごと

に町の中を移動。記念誌に収められた卒業生の手記には「山の上の校舎が出来るまで放課の時間(休み時間)は、教室から教室へ歩くのが精一杯でした」(丸がっこ以外は原文)とつづられてる。

「山の上の校舎」とは一九二二年一月、現在の校舎裏手の弘法山に完成し利用が始まった新校舎をさす。校舎の全容は明らかではないが、大社神社近くに残されていた宝飯中の建物(山の麓から移され、正面玄関や理科室、家事室などとして使われたという)。

女学生らの手記には小高い弘法山からの眺望についての記述が目立つ。「四方の景色が遠くまで眺められ

何一つ雑音もなく、本当に勉強するには最高の環境でした」。初めての運動会も開催され、次々と学校らしい行事が始まった。

だが弘法山での学校生活は、たった一年で幕を閉じることになる。当時の原敬内閣の下で郡制の廃止が決定。郡立の宝飯高女を県立へと移管するには、より広い敷地が必要だったが、山の中腹を切り開いた土地には拡張の余地がなかった。

郡は麓の田園地帯を埋め立て、現在の場所に校舎を移転。宝飯高女は二三年三月、県国府高等女学校と改称し、再出発を図る。新校舎の落成式ではもち投げや花火、相撲などが催され、地域の住民らが祝福。数日後には開校して初めての卒業式が開かれ、四十八人が母校を巣立っていった。

◇ 二〇二〇年に創立百周年を迎えた国府高校。大正、昭和、平成、令和と移りゆく時代の中で、地域社会に三万三千人以上の卒業生を送り出してきた同校の歩みをたどります。

(この連載は川合道子が担当します)